変容

ススキの鋭い葉が指を切るような
衝撃的な痛み

銀色に光り輝く鉄管に
僕は縋り付く

それと同時に
脳天が割れてゆくような錯覚

かつて僕の許から逝った者が
遠く霞むように浮かぶ

崩れ落ちてゆく細胞の集合体
天はあくまで高く、そして青い

誰も止めることはできない
僕が僕自身でなくなってゆくのを

誰も止めることはできない
あらゆる記憶が枯れ落ちるのを

再構成されてゆく身体
沸騰し、全身が勝手に身悶えている

己に別れを告げることができることの
ああ、何という歓喜

再生と呼ぶことのできぬほどに
うち捨てられた存在となること

あの空のように

永久(とこしえ)に

永久に

(2010.10.1)